綴葉 ていよう

'24 3

No. 425

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

本田晃子著『革命と住宅』

夢枕獏著『陰陽師　烏天狗ノ巻』

特集／大学的読書事始め2024

新刊コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階

Tel:771-6211 ／ E-mail:ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

身体的な住宅と、虚像としての亡霊建築

革命と住宅

本田晃子著
ゲンロン叢書

建築には力がある。実体として人々に影響を及ぼす直接的な力と、虚像として存在し概念として作用する力。大きな理想が建築に託されたソ連では、その二極性がありありと表れており、それを見事に描くのが本書である。著者は表象文化論を専門とし、数々の映画や書籍にも着目することで、ソ連における当時の人々の生々しい生活や、建築に対するイメージを読み解いていく。

◇身体的な住宅

住宅は、人々の生活を、現実を、常に鮮烈に映し出す。著者曰く、「ソ連建築は常に過小であると同時に過剰でもある」状態にあった。十月革命後、人々は建築の力に熱狂的な期待を掛け、住宅を一から設計しなおすことで、合理的（＝社会主義的）な人々を生み出すことができると信じていた。一方、その試みの多くは不完全なまま終焉を迎えた。労働者住宅の現実は政府が掲げた理想とは大きく乖離しており、人々は深刻な住宅不足と貧困に苦しめられ、混沌の中で生活を送ったのだった。

本書はそんなソ連の住宅の二面性を、極めて誠実に、丁寧に描いている。住空間を物理的に共同化することで社会主義的な生活様式を作り出すことを試みた集合住宅「ドム・コムーナ」と、そんな理想とは裏腹に強制的に共同生活を送らされていた労働者の現実。レーニンの「圧縮」政策によって皮肉にも生活の社会主義化が達成された「コムナルカ」と、そのキッチンに鳴り響く人々の怒声、口論。ソ連住宅は「建築のリアルとリアリティの葛藤の場」であったのだ。

◇虚像としての亡霊建築

建築は人々に対して直接的、身体的に作用する実体である一方で、抽象的な概念として示されることがある。特にソ連においては、輝かしい理想に現実が追い付かず建てられなかった建築、実体を持たないまま映画や絵画の中でのみ存在していた、いわゆる亡霊のような建築が多く存在する。最たる例は、この世界には実現し得ないほど巨大なレーニン像を構えたソヴィエト大聖堂である。映画においては、模型や背景画を組み合わせるという（「死体を操作して動かすような」）手法によって描かれ、理想のモスクワ像を示す重要な指標となった。

そして、海外渡航が厳しく制限される中で、ソ連の若手建築家たちが日本を含む各国のアイデアコンペに密かに作品を投稿していた「ペーパーアーキテクチャー運動」。「知名度はほぼゼロ」だったこのテーマを取り上げることができたのは、建物を形体ありきのものではなく、取り巻く表象も含めて扱う著者だからこそであろう。

紹介される建築はもちろん、映画・書籍もどれも興味深く、本書はソ連と建築に関する文献の目録としても充実している。ソ連、建築、そして映画。様々な角度から読者の心を掴んで離さない、贅沢な一冊。

（芷漠）

（三四八頁　税込二九七〇円　10月刊）

今年は平安が熱い！——花薫る京の都の物語

陰陽師　烏天狗ノ巻

夢枕獏著
文藝春秋

京都は堀川通一条上ル、初夏から桔梗の花咲く美しい神社がある。その名も晴明神社。大河ドラマ『光る君へ』でも暗躍中の安倍晴明公が祀られた神社である。天文暦学の知を用い、平安の京の怪異事件を解決していったスーパー陰陽師。そんな天才晴明も、本作では〝冷淡に見えて実はいい奴〟という何ともときめくキャラクターに。そして物語の核を担うもう一人は、源博雅。情に厚く涙もろい、晴明の無二の友だ。着かず離れず、だが互いを必要としあう。そんな二人の美しい関係についてはぜひ既刊作品に触れてほしい。ちなみにNetflixでは、本シリーズを基調とするアニメ『陰陽師』が公開されているので、そちらも併せてどうぞ。

想いが生む「呪」

本作に主人公はいるのだろうか。もちろん、物語の中心には晴明と博雅がいる。彼らが鮮やかに事件を解決する様や、二人の微笑ましい会話はたしかに魅力的だ。だが、本書の味わいの奥には、もっと別のものがあると思う。万のものの〝強い想い〟。物語の柱となり、我々を惹きつけてやまないのは、この想いだと私は思う。

「金木犀の夜」が描くのは、救いを求める人間の想いに囚われたものの怪。澄んだ秋の夜、一人の老婆が晴明を訪れる。痩せ細り、全身吹き出物に蝕まれた老婆。人外の彼女は、観音菩薩像の身代わりとして、病気平癒の祈りを、ひいては人々の病を一身に背負っていた。想いは、祈りは、生きている。そしてその想いがことばや像の形に注ぎこまれるとき、それは「呪」になる。ものの怪も人も関係ない。彼らはみな等しく「呪」によって縛り、縛られる世界を懸命に生きている。時に誰かを救い、時に相手に害をなしながら。

いとしき万のものたち

そんな「呪」には魂をも動かす力がある。「梅道人」は梅薫るこの季節に読みたい一話。さて、袖薫という名の老人、死の淵をさまよっている内に桃源郷のような場所へ辿り着いた。その地の心地よさに満足していた袖薫だが、なぜか次第に気力が失せていく。なぜか。歌が詠めないからだ。幼い頃から歌を愛してきた彼にとって、歌は命そのもの。歌の想湧かぬ仙境では、生きたいという欲など絶えてしまう——「歌を詠みたい」。このことばが「呪」となって、袖薫の魂を現世に呼び戻す……。魂の道すじをも変えてしまう、それが「呪」だ。〈憎い〉〈恋しい〉〈食べたい〉——。みな何かへの強い想いを抱き生きている。「呪」となるほどに強い想いを。形相恐ろしきものの怪にさえ、なぜか愛おしさを感じるのは、想いのために我をも忘れて生きる姿がけなげに映るからなのか。

最後に。この「梅道人」を含め、本作ではよく歌が詠まれる。どれも声に出して読みたくなるようなものばかり。

〈梅が枝を袂にさせばうつり香の風にのりてもゆくこころかな〉

あなたの想いもきっと風にのって飛んでゆくはず。　（はらん）

（二八〇頁　税込一七六〇円　10月刊）

〈特集〉大学的読書事始め2024

毎春恒例のこの特集は、たくさんの本をとても短い書評で紹介していきます。ぎゅうぎゅうに詰められながら、各々がなんとか魅力を伝えようとするさまは、さながら新歓ビラロード。これじゃあどれを選ぶべきか、正確に判断できないじゃないか！　そう思っているそこのあなた。失敗しない、効率の良い道なんて探さずに、ふと目についただけの本も手にとってみませんか。

それが遠回りでもいい、いやむしろ遠回りこそ財産になる。そんな一歩こそが、私の思う、大学的読書事始めです。（朝露）

京都の山と川
「山紫水明」が伝える1000年の都
鈴木康久／肉戸裕行著　中公新書

碁盤の目のような京都の街並み。そのどこからでも山々が目に映り、水の流れる音が聞こえる。そう、京都とは山と川に囲まれた「山紫水明」の土地なのだ。京都人憩いの鴨川デルタ、東にそびえる比叡山や大文字山、京都の近代化を支えた琵琶湖疎水……。

本書を片手に千年の都の自然を紐解けば、京都での生活が楽しくなること間違いなし！

（二九六頁　税込一〇一二円）

ポケットに外国語を
黒田龍之助著　ちくま文庫

春は外国語の季節。著者の黒田先生もそう言っている。第二外国語はどうしようか。シラバスを眺めるだけでワクワクしてくる。

「字面が挿絵から文字に変わる。それが外国語学習なのかもしれない」と著者は言う。ある時点を境に景色が変わる。新たな言語を学ぶとはなんと豊かなことか。語学に裏技なし、地道に一歩ずつ。そんな果てなき旅路を共に行く一冊を。（三〇四頁　税込八八〇円）

（浅煎り／ひるね）

勉強の哲学
来たるべきバカのために　増補版
千葉雅也著　文春文庫

大学での勉強って一体何をすればいいの？そんな君には、「勉強」の原理をフランス現代思想の視座から論じた本書をお薦めしよう。「深い勉強」とは獲得ではなく喪失であり、「ノリが悪くなること」であると心得よ！

自らの勉強への向き合い方が刷新される一冊だ。これまで体験したことのない「学び」の世界へ――新たなキャンパスで真の「自由」を手に入れろ。（二五四頁　税込八五八円）

基礎からわかる論文の書き方
小熊英二著　講談社現代新書

学問には論文が付きものだ。そして、論文を書くとは、根拠を提示して自分の考えの正当性を示し、相手を説得する行為である。ゆえに著者の小熊英二は、論文の書き方を学べば企業での実務にも役立つという。本書は著者の「アカデミック・ライティング」という講義を基に作られたため、談話形式になっており読みやすい。論文執筆に悩む前にぜひご一読を。（四八〇頁　税込一三二〇円）

（浅煎り／前髪）

春宵十話

岡潔著
光文社文庫

「人の中心は情緒である」。京大出身の奇才数学者・岡潔の随筆は、この一言から始まる。

彼の人間観は良くも悪くも古めかしく、学問観は不可思議だが、どこか説得力と温かみがある。「よく人から数学をやって何になるのかと聞かれるが、私は春の野に咲くスミレはただスミレらしく咲いているだけでいいと思っている」。彼の言葉に背中を押される人もいるだろう。（二二五頁　税込五二四円）

数学という学問Ⅰ
概念を探る

志賀浩二著　ちくま学芸文庫

学校で教わる数学はどこか味気ない。既に整理され抽象化された綺麗な数学は、あまり面白くはないだろう。本書では数学の概念が形成されてきた歴史を、数の誕生から微分積分の成立まで辿っていく。実数や変数、関数といった概念は、必要だから生まれてきた。人々の願いを叶える新たな概念を生み出す過程は、数学に新たな彩を添えてくれるだろう。

（二七二頁　税込一一〇〇円）

（朝露／筏）

異文化コミュニケーション学

鳥飼玖美子著
岩波新書

大学には多種多様な人が集まっており、毎日が異文化体験といえる。つまり、均質性の高い日本の大学でも、葛藤を経験することはある。本書は、主に韓国ドラマを例に用い、異文化コミュニケーション学の基礎を平易に解説してくれている。「話が通じない！」と相手を卑下し、関係の修復が不可能になる前に、異文化への心構えを本書から学んでおくのをお勧めする。（二二六〇頁　税込九二四円）

会話を哲学する
コミュニケーションとマニピュレーション

三木那由他著　光文社新書

言葉に裏表がない人、というのは誠実で良い人だろうか。それは一理ある。が、そんな人はなかなかいない。実際の発話とその意図がぴったり対応していないことはよくある。誰もが会話の背後に企みを抱えているのだ。

「帰れ」と怒っている人が意図しているのはあなたが帰ることではない。そんな複雑怪奇な人間の行為を学術的に分析してみるのが本書である。（二九九頁　税込一〇一二円）

（前髪／ひるね）

「その日暮らし」の人類学
もう一つの資本主義経済

小川さやか著　光文社新書

何十年も先の未来のために今を犠牲にする生き方があたりまえになってしまった現代。本書はアフリカ都市で行商人を研究してきた著者が「その日暮らし」で編まれる社会や経済を描き、発展主義的で息苦しい現状を問う。仕事を転々とする都市民や模倣品産業など、一見ハチャメチャな事例も経済合理性や慣習により鮮やかに分析され、凝り固まった価値観が崩れていく。（二二四頁　税込八一四円）

路上観察学入門

赤瀬川原平／藤森照信／南伸坊編
ちくま文庫

マンホール、看板建築にゴミ箱、あるいは建物の破片。一見なんてことないモノを対象に徹底的に観察を行い、「学問的」に調査・発表するのが「路上観察学会」だ！

犬と仲良くなるのに奮闘したり、灰皿の煙草の形状を記録したり。ふざけているようだが彼らは極めて真面目である。一度読んだら仲間入り。あなただけの「路上観察」をしてみないか。（三八〇頁　税込八五八円）

（たいやき／茫漠）

発酵文化人類学
微生物から見た社会のカタチ
小倉ヒラク著　角川文庫

世界中で生まれた発酵文化を広める「発酵デザイナー」の著者が、全国の発酵食品を研究して記したフィールドノート。文化を多様にする地域性に焦点を当てた発酵についての説明や、その仕組みを贈与論に当てはめた説明などが描かれる。発酵を文化人類学的な議論に当てはめつつその素晴らしさを終始訴えるタイトルどおりの内容に、読者は感銘を受けるだろう。（四〇〇頁　税込八八〇円）

生理用品の社会史
田中ひかる著
角川ソフィア文庫

生理用品の発展は、女性の生活や社会活動と切っても切れない関係にある。日本各地に存在した月経禁忌の慣習は挙げていくとキリがない。テレビCMで流すことも憚られる時代から、使い捨てナプキンが普及するようになるには、たゆまぬ企業努力があったのだ。「生理の貧困」等、まだまだ社会課題が尽きない中で、生理用品の現在地を知るために必読の一冊。（三〇四頁　税込一〇五六円）

（ブラチ／茫漠）

すべての雑貨
三品輝起著
ちくま文庫

「なんかいい」感覚に振り回される私たちの生活。服に音楽。文房具。食器。あるいは最近始めた趣味や出かける場所も、なぜそれがいいと感じるのか、選んでいるのは自分なのか、もはや分からなくなってはいないか。

人や物との繋がりから距離を置き、一人になるのに本はとても良い存在だ。大学生活に張り切りすぎて疲れたあなたに読んでほしいエッセイ集。（二八四頁　税込八八〇円）

発声と身体のレッスン
―魅力的な「こえ」と「からだ」を作るために
鴻上尚史著　ちくま文庫

大学生、ファッション、髪型、大事！　しかしお金が！　という訳で、お金をかけずにパワーアップしたい貴方におすすめしたいのが本書。数々の役者を育ててきた著者が「貴方の感情やイメージがちゃんと表現できる声や身体を手に入れる」ための具体的方法を惜しみなく披露してくれる。外付けでないから半永久的に保持できる、貴方だけの魅力を身につけませんか？（三五一頁　税込九九〇円）

（茫漠／黄丹）

中島らもの特選明るい悩み相談室
その1　ニッポンの家庭篇
中島らも著　集英社文庫

悩み相談室ってこんなんだっけ？　一晩中娘の『りぼん』を読んで完読自慢してくるお父さんとか天国の夫との年の差を気にするお婆ちゃんについて相談するっけ……？　いやこれ相談じゃなくてネタ合戦！

そう、本書は真顔で人を笑わせる技術を身につけるための教養本である（多分）。バトルにくっくと笑って、愛しくなって。さあ、明日も生きるかー。（二三二頁　税込六六〇円）

生まれてきたことが苦しいあなたに
最強のペシミスト・シオランの思想
大谷崇著　星海社新書

気分が沈み鬱々としている時、到底他者にぶつけられない暗くどんよりとした呪詛が沸き上がってくる。そんな時、シオランの本を開くと自分の考えと似たことが書いてあり、あまりの過激さに苦笑してしまう。ペシミストたちの王、シオランはそんな思想家だ。苦しい時は本書を手に、笑いながら世界を呪おう。たとえそれが生き延びる理由になってしまっても。（三五二頁　税込一二一〇円）

（黄丹／筏）

華氏451度〔新訳版〕

レイ・ブラッドベリ著
伊藤典夫訳　ハヤカワ文庫SF

本が禁制品とされ、見つかれば家ごと燃やされる――その温度、華氏451度。

この物語が描くのは、知や思考を禁ずる管理社会の恐ろしさだけではない。そこに〝安住〟するのは、空虚な快楽に依存し、思考も豊かな感情も自ら捨ててしまった人々だ。

人は脆い。思考停止からの脱出は苦痛なのだ。現代人こそ身につまされる、ディストピア小説の古典。（二九九頁　税込九四六円）

ナイン・ストーリーズ

J・D・サリンジャー著
柴田元幸訳　河出文庫

アメリカ文学史に燦然とその名を残すサリンジャーが自ら選んだ九つの物語がここに。

どんな話か。それを説明する言葉を私は今も見つけられずにいる。私たちと歳の近い若い彼らの会話は軽やかでそして同時に空虚だ。

本書の扉にはこうある。――両手を叩く音は知る、ならば片手を叩く音は？　解釈は読者に委ねられた。この物語を今のあなたはどう読むだろうか。（三二〇頁　税込八九一円）

（朝露／ひるね）

モンテ・クリスト伯（全7巻）

アレクサンドル・デュマ著
山内義雄訳　岩波文庫

一九世紀中葉、フランスで史上最高の一冊が産まれ落ちた――それがこの『モンテ・クリスト伯』。幸福を目前にして突然逮捕された一介の水夫、エドモン・ダンテスは絶海の孤島にある牢獄に幽閉されてしまう。果たして彼はここから脱出し復讐を遂げるのか？

断言！　これより「面白い」小説はどこにもない。心躍る小説の世界に出かけませんか？　（四一二頁　税込一一二〇円）

シカゴ育ち

スチュアート・ダイベック著
柴田元幸訳　白水Uブックス

一人暮らしは時に退屈だ。変わり映えしないひとりぼっちの路地裏をたとえば思い浮かべてみてほしい。でも、そこには無限の世界が広がっている。シカゴの裏ぶれたストリートに、一瞬で魔法をかけるダイベックの短編集を片手にすれば、きっとあなたにもそれがわかってもらえるだろう。なにせあの柴田元幸の「最高の一冊」だもの。

（二二四頁　税込一三二〇円）

（コーク）

虞美人草

夏目漱石著
新潮文庫

夏目漱石といえばやっぱり『こころ』？　いやいや違います、『虞美人草』ですよ。間の悪い主人公、妖艶なヒロイン、気の良い友人。若い彼らが若い日本で繰り広げる物語は、明治からは隔たった僕達をも、何度でも前を向こう、そして走り出そうと思わせます。熱い気持ちを忘れないためにあなたに。

漱石作品には珍しく京都が出てくるのもツボ。　（四九〇頁　税込六〇五円）

残像に口紅を

筒井康隆著
中公文庫

世界から「あ」が消えれば、「愛」も「藍」も「秋」も「あなた」も消える――

小説家・佐治勝夫は、自らが〝小説の主人公〟であることを自覚していた。平穏幸福な人生に刺激を求めた彼は、友人の提案に乗り、世界から音が消えていく「虚構（きょこう）」を描（えが）く……。愛しきものたちが意識からこぼれ落ちていく虚しさ。現実と虚構の融解を描ききった、圧巻の実験的小説。（三四四頁　税込八一七円）

（コーク／はらん）

たゆたえども沈まず

原田マハ著
幻冬舎文庫

ゴッホとテオ。後世「炎の画家」と呼ばれる兄と、彼を献身的に支える弟。その絵が新しすぎて世に拒否され苦しむ画家は、理想郷「日本」を夢見た。ここまでは史実。本書では、もし彼らと一時を共にした日本人がいたら――を描く。挫折し、傷つき、それでも自分の「目」を信じる彼らの姿は、きっと貴方の研究生活、そして人生において消えない灯火となるだろう。（四五〇頁　税込八二五円）

近代絵画

小林秀雄著
新潮文庫

批評の神様・小林秀雄。最も好きな彼の作品は何かと問われたら、私は迷いなく『近代絵画』を挙げる。モネに始まり、セザンヌやゴッホ、ゴーガンを経て、最後にピカソにたどり着く。印象派からポスト印象派へ、そしてキュビスムへ――小林の言葉は画家の真髄を掴みにかかる。絵画とはこんなにも面白いものだったのか――読むたびにそう唸らずにはいられない。（三八八頁　税込九九〇円）

（黄丹／ぱや）

鉄の時代

J・M・クッツェー著
くぼたのぞみ訳　河出文庫

アパルトヘイト下の南アフリカ、白人居住区に住むミセス・カレンは末期がんを宣告され、海を隔てて暮らす娘への遺書に日々の生活を綴った。行き場を失った浮浪者、強権的な警察、路上の少年たち。一人の女性の生と死を通じて、人種差別の暴力という人類史の「恥」が浮かび上がる。南ア出身のノーベル賞作家クッツェーによる、現代アフリカ文学の新たな古典。（三二九頁　税込一三二〇円）

カール・マルクス
「資本主義」と闘った社会思想家

佐々木隆治著　ちくま新書

生誕二百年を経ても古びぬどころか、なお一層鋭さを増すマルクスの思想。資本主義の矛盾という人類の謎に迫る彼の透徹した理論、それを作り上げた時代と人生が、本書では明瞭かつに詳細に解説されている。

また、エコロジーやジェンダーの観点からその思想の現代的意義が逆照射されている点も高評価。二〇二〇年代における最良のマルクス入門書。（二六三頁　税込九六八円）

（たいやき／浅煎り）

暴力の哲学

酒井隆史著
河出文庫

「暴力はいけません」と言いながら、暴力抑止のための暴力行使を正当化している国家。このように、モラル的に正しいとされている事例をもとに、「正しさ」が暴力を助長している側面を持つという現実を読者に突きつける。暴力と非暴力という二項対立が孕む矛盾に迫りながら、正義とは何かというシンプルだが複雑で難しい問いについてヒントを与えてくれる。（二七二頁　税込一〇五六円）

大杉栄伝
永遠のアナキズム

栗原康著　角川ソフィア文庫

「芸術は爆発だ！」と岡本太郎が叫んだとすれば、天衣無縫のアナキスト・大杉栄はその生涯を通じてこう叫んだのではないか――「人生は爆発だ！」。本書が描く大杉の生涯は爆発に次ぐ爆発だった。彼は何度死にかけ、何度監獄に入ったのだろう。それでも彼は支配や抑圧を拒否して叫び続ける――「もっとわがままになれ！」。アナキズムの神髄、ここにあり。（四一六頁　税込一三二〇円）

（プラチ／ぱや）

ソクラテスの弁明

プラトン著　納富信留訳
光文社古典新訳文庫

問答によって知を探究するソクラテスは、しばしば知識人の知ったかぶりを暴いて恨みを買っており、ついに謂れのない告発を受けてしまう。そんな彼の法廷での弁明の様子を、プラトンが描いたのが本書である。

魂への配慮、知への愛。演説で語られるのは、善く生きよという全人類への勧告にほかならない。読んだ者の心に哲学の種をまく、不朽の必読書。（二一六頁　税込九九〇円）

君主論

マキアヴェリ著　池田廉訳
中公文庫

後世に絶大な影響を与えた一六世紀イタリアの思想家、マキアヴェリ。その彼が非人道的ともいえる君主の理想像を説いた本書……いや、この解釈は正しいのか？　否。非情な面だけを切り取ってはならない。本書の根底に流れるのは、〝人間〟に対する鋭い観察と考察なのだから。明晰な語り口で、理想よりも「生々しい真実」に迫った彼の人間観をとくとご覧あれ。（二七二頁　税込八八〇円）

（朝露／はらん）

図説　金枝篇（上）

J・G・フレーザー著　S・マコーマック編
M・ダグラス監　吉岡晶子訳　講談社学術文庫

イタリア、ネミの森の祭司は、王の称号も与えられる偉大な地位でありながら、「金枝」を手に入れたものに殺される宿命にある。なぜ祭司が王を兼ねているのか。なぜ王は殺される掟となっているのか。世界各地の呪術、神話、信仰が持つ共通の構造を見出し、ネミの神話を解明していく。現代から見れば批判される点も多いが、独自の呪術的社会論は一読の価値あり。（二九六頁　税込一一〇〇円）

悲しき熱帯（全2巻）

レヴィ＝ストロース著
川田順造訳　中公クラシックス

構造主義を提唱し、現代思想に大きな影響を与えた社会人類学者レヴィ＝ストロース。本書は彼が半生とブラジルでの研究調査を振り返った自伝的紀行文だ。話は時系列に沿って進まず、唐突に深い思索へと入っていく。

調査地での思考の過程を追うことで、西洋中心主義を痛烈に批判する彼の思想が、未開社会への深い洞察の中で醸成されたことがわかる。（I巻　三七二頁　税込一五九五円）

（筏／たいやき）

オリエンタリズム上

エドワード・W・サイード著
板垣雄三／杉田英明監　今沢紀子訳　平凡社ライブラリー

東洋（オリエント）に対する西洋（オクシデント）の思考様式である「オリエンタリズム」。本書は、西洋中心主義的な考え方であるこれが「支配の様式」となる過程を分析し、痛烈に批判する。そして、西洋が文化相対主義を利用して優位性を構築することにより、文化人類学が植民地政策に加担した事実を指摘した。世界中への問題提起に成功した、ポストコロニアル研究の古典である。（上巻　四五六頁　税込一七〇八円）

意識と本質
精神的東洋を探めて

井筒俊彦著　岩波文庫

歩いていると道端に何かを見つけた。「あ、花だ」と私は呟く。このとき私の意識はある対象Xを、石でも川でもなく花として認識している。私はXが何であるか、つまりXの本質を捉えている。こうして意識が本質を把握する際に起こっていること、それが本書の分析対象だ。書名の難しさとは裏腹に、議論の対象は身近なこと。前提知識がなくても素手で挑めるはず！（四一八頁　税込二二七六円）

（プラチ／ぱや）

新刊コーナー

シャーロック・ホームズの凱旋

森見登美彦著
中央公論新社

待望の森見氏新作、その舞台はヴィクトリア朝京都である！あのホームズとワトソンが、森見ワールドを駆け回るのだ！

が、ここが森見ポイント、ホームズはスランプ真っ最中なのだ。毎日のんべんだらりと「スランプ研究」するホームズに、ワトソンが頭を悩ませる場面から物語は始まる。

この物語の異彩、ひいては森見氏の唯一無二の才を示す点、それは氏自身もまた長きに亘りスランプと闘いながら執筆を続けてきたことだろう。自分のスランプをこれほど愛らしく、苦々しく主人公に投影できる著者が他にいるだろうか。森見氏は語る。この物語をもって大迷宮から脱出した〝はず〟だ、と。

ときに、森見ワールドは愉快で阿呆な面となんとも言えぬ不気味な面を持つように思う。これらはきっと別の物ではなく、裏表なのだ。昼の朗らかな大文字山が夜は魔物の巣窟に見えるように。本作も初めはわちゃわちゃ愉快な彼らが、ある「非探偵小説的事件」すなわち「解いてはならない世界の真理」に遭遇することで、一気に様相を変える。この「真理」は『夜行』の〝絵〟であり、『熱帯』の〝本〟である。だが、本書はそれら前作を超えていく。森見ワールドの真ん中に君臨する「真理」に肉薄し、曖昧模糊としていたものを明白に書き表わしたのだ。「真理」との決着が本作の肝であり、これまでの森見作品の総決算であると思う。さあ諸君、ホームズ達と森見氏の「京都」への凱旋をお祝いしよう！

（黄丹）

（四八〇頁　税込一九八〇円　1月刊）

ビボう六

佐藤ゆき乃著
ミシマ社

――次の角を曲がった先で、きっとなにか、素敵なことが起こるかもしれません。……京都には、角がたくさんあるので、素敵なことが起こりやすいのです。――

新しく生活を始めた京都、慣れ親しんだ京都。あなたにとって京都はどんな街でしょう。これは、私たちと同じように学生時代を京都で過ごした著者が描く京都が舞台の物語。

昼間の京都の反対側には永遠に夜が続く「夜の京都」が存在します。夜の京都の住人で散歩を愛する怪獣・ゴンスは、ある日二条城のお堀で、昼の京都からやってきた小日向さんと出会いました。彼女はここに来る前のことを何も覚えていないよう。そんな彼女にゴンスは笑って大丈夫と伝えます。ゴンスの「ビボう六」にも笑顔が大切だと書いてあります。この世界には忘れたくないこと、大切なことが六つあり、全部集めたとき世界は完成するという。ゴンスは今、最後の一つを探しているところです。

北野天満宮の天神市、八坂神社に鴨川、木屋町の純喫茶・ソワレ。ゴンスは小日向さんを連れて夜の京都を散歩します。魅力たっぷりに描かれるソワレの色とりどりのゼリーポンチを二人はどんな味だと言うのでしょうか。

これは昼と夜、現実とファンタジー、二つの京都が織りなす物語。現実に傷ついた「私」を夜の京都は優しく迎えます。さまざまな顔を見せる京都。この本を閉じたあと、あなたが歩く京都の街は少し違って見えるはず。そこには、ゴンスが連れ出してくれたあの夜の優しい京都の記憶が残っています。（ひるね）

（一六〇頁　税込一九八〇円　11月刊）

空想の補助線
――幾何学、折り紙、ときどき宇宙
前川淳著
みすず書房

天文台のエンジニアとしての顔も持つ折り紙作家による、科学エッセイ集である。――というと、なんだか専門的で難しそうに思われるかもしれないが、本書はあまり専門的なところまでは踏みこまず、難解な数式も用いない。かわりに折り紙と天文学を縦糸としながら、あちらこちらへ横糸は伸び、興味深い話題がつぎつぎと繰り出される。折り紙と数学の関係を論じたかと思えば、パスタのかたちに幾何学を見出し、ときに谷川俊太郎の詩を天文学的知見から読む、といったぐあいに。

いくつもの分野を渡り歩きながら連想的に話題を繋げてゆく、著者の足取りはとても軽やかだ。そうして編み上げられる意味ありげなネットワーク――緩やかな線の結びつきこそ、表題にもなっている「空想の補助線」なのだろう。よくできた幾何学の問題のように、その補助線は世界の思いがけない見方を与えてくれる。

けれどもその線はあくまで空想であって、何かしらの意図を見出したり神秘に傾倒したりすることは危うい。著者が楽しむのは繋がりの面白さそのものであり、一致すること自体は偶然なのだ。現に著者は数学的にぴったり計算が合う話ばかりではなく、合っているようで微妙にずれてしまう事例も取り上げている。それは数学的厳密さからは遠いかもしれないが、そのずれを面白がる懐の深さ、緩やかな雰囲気こそ本書の最大の魅力だろう。科学を気軽に、しかし奥深く楽しむにはうってつけの一冊だ。　（投稿・水炊き）

（一八五頁　税込二九七〇円　12月刊）

山と言葉のあいだ
石川美子著
ベルリブロ

たまに、本当にたまに、読むと救われる思いがする本に出会うことがある。そんな本にめぐり逢うことはなかなかできないが、私にとって本書はそんな本だった。

本書は、ロラン・バルトの翻訳で知られる著者によるエッセイ集。フランスはモンプランのふもとに位置する小さな町、シャモニーをめぐって、静かで美しい文章が紡がれてゆく。その美しさは実際に見てもらうのが一番早い。ひとつめのエッセイ「遠い記憶の引きだし」の冒頭文――「山道をゆっくりと歩いていると、なつかしい人の言葉をふっと思い出すことがある。静けさのなかで目にする草花や、曲がりくねった道、はるかな山々が遠い記憶をさそいだし、そっと差し出してくれるかのようだ」。ここに紡がれたやわらかな言葉の姿かたちをただ見ているだけで、その美しさに思わずため息をついてしまう。

別のエッセイで著者は言う。「亡き人の存在は、年月とともに遠ざかるどころか、だんだんと近く、鮮明になってきている。彼らの言葉によって、今のわたしは支えられ、生かされているのだと思う」。過去の記憶に現在のわたしは支えられ、生かされている。だとすれば本書は、著者を支え生かしている過去の記憶たちを書きつけたものだと言えるだろう。留学中に出会ったマダム・ミヨー、シャモニーで出会ったマツイさん、植物学者だった父、今は亡き彼らの姿、そしてその記憶――。

ふとした瞬間に私は本書を思い出す。そうして本書は、過去の大切な記憶として私を支え、生かし、救ってくれるのだろう。（ぱや）

（二八八頁　税込二八六〇円　11月刊）

君が代は千代に八千代に
高橋源一郎著
講談社文芸文庫

帯に「最高傑作」と書いてある。読んでみる。混乱する。なんだこれは？　タイトルはこの上なく折り目正しいのに、登場するのは崩壊しているようにしか見えない家庭とか（でもなぜかみんな平気そうなのだ）、事務処理に追われる殺し屋とか、少年鑑別所での心温まれない交流とか、下品きわまりないフレーズとか、そういうものばかり。僕の知っている世界は、文学は、どこにいってしまったんだろう？　熱い恋の情熱とか青年の苦悩とか、うつくしい言葉遣いとかはどこにいってしまったんだろう？

でも、読み進めていくうちに段々納得してくる。この短編集の世界は、つまりこういうふうに成り立っているんだな、と。そして引き込まれる。意味がわからない事件も、いったんそういうものとして受け入れてみるなら、それはたしかに、そういうものだったような気がしてくるものだ。ここまできたらもう、あなたは虜になっている。そもそもこういうものって実は、僕たちが毎日そのあたりで、ニュースで、目にしていたものなんじゃないだろうか？　この短編集はその言い方がいつもの本とはなんだか異なっているけども。さらに読み進めると、めちゃくちゃに思えたこの短編集の世界にひっそりと息づいた詩情に、文字にならない文学に、あなたは出会うことになるだろう。

そしてあなたは夢中になって読み進める。そして最後のページに辿り着き、本を閉じ、納得する。これはたしかに、「最高傑作」かもしれないな。（コーク）

（二八八頁　税込二三一〇円　12月刊）

少女、女、ほか
バーナディン・エヴァリスト著
渡辺佐智江訳
白水社

すさまじく力強い小説に出会ってしまった……。本書を読み終えたとき、私は心を激しく揺さぶられていた。したたかに、しなやかに生きる人間たちの、魂の叫びを全身に浴び続けた。異様な読書体験だった。

劇作家のアマは、黒人女性・レズビアンなことから長年にわたり業界の周縁に追いやられながらも、小劇場で活動し確かな経験を積んできた。そして五〇代にしてついに、ロンドンのナショナル・シアターで自作の戯曲を上演する機会を得る。初日の記念パーティに集まったのは、黒人にルーツを持つ女性やノンバイナリーの十二人だった。劇作家、大学生、銀行家、清掃員、教師、インフルエンサー、農場経営者――家庭環境も時代背景も全く異なる十代から九十代までの十二人が語り手となって、自らの人生を振り返る。移民として子供を抱えながらロンドンで生きること、思春期のレイプ被害、娘との不和、性転換、ひとりひとりが葛藤を内に秘めながらも自らを肯定し、前だけを向いて生きてきた。読み進めていくと、それぞれの人生は思わぬ形で幾重にも交差し、共鳴していく。

本書の特徴は、句点を用いず自由自在に改行する無二の文体にある。目の前で肉声を聞いているかのような感覚に陥り、途切れることのないリズムに入り込む。これにより、圧倒的な情報量であるはずの十二人もの人生の感情の機微が、するりと読めてしまう。

人種、移民、階級、フェミニズム、セクシャリティ。現代イギリスの主題を鮮やかに描く、究極のエンパワメント小説。（たいやき）

（五二六頁　税込四九五〇円　10月刊）

文学のエコロジー

宮下志朗著
左右社

〝エコロジー〟といっても、本書のそれは自然環境を指す語ではない。「文学を取り巻く環境」を意図して、用いられた語である。中身は知っているあの名作が、いかなるプロセスを経て人目に晒され、どのように読まれ、今日まで伝えられてきたのか。作品を文学たらしめる部分に触れる機会は案外少ない。作者、読者、流通や庇護、検閲に著作権、それらに眠る歴史を本書は繙いていく。

前半部の目玉となるのは「読み方」の歴史。古代において誦じ、演じられてきた文学は、中世になると徐々に「書き物」として読まれることとなる。「音読」から「黙読」へ。緩やかながら変容する、読みの在り方が浮かび上がる。そして一六世紀、先の特集でも登場した思想家マキアヴェリは、自身の読書についてこう語った。晩になると普段着を脱ぎ、立派な礼服を纏って書斎に入る。「身なりを整えたら、古の人々が集う古の宮廷に入ります。私は彼らに暖かく迎えられて、かの糧を食します」。労働の昼と読書の夜。マキアヴェリにとっての夜は、書物に宿る先人たちとの語らいの時間であり、神聖で非日常的なひと時だった。書物との対話から自己を省察する――読書が日常生活に溶けこんだ現代においても忘れたくない姿勢だろう。

文学を知るための教科書としてはさることながら、豊富な引用ゆえに、読み物としても逸品の本書。物乞いさながらにパトロンへ媚びるヴィヨンの詩や、印税を巡るフロベールと版元のバチバチの攻防戦には、思わず笑ってしまうこと間違いなし。　（はらん）

（三二〇頁　税込二四二〇円　9月刊）

シャドウ・ワーク

イリイチ著
玉野井芳郎／栗原彬訳
岩波文庫

〈シャドウ・ワーク〉――市場経済において、なぜか無償とされてしまう家事や通勤時間のような、影の労働のこと――。

歴史家にして思想家であるイリイチは、この卓抜な表現を用いて賃労働の背後にあるジェンダーの不均衡を批判した……との理解はやや一面的に過ぎる。彼はこの概念を拡大鏡として、近代産業社会における人間の「生」という堅牢な謎を相手取ったのだから。

『脱学校の社会』『脱病院化社会』を著した彼は、我々の「生」を管理する近代の機序を鋭く批判する。本書で彼が矛先を向けるのは、賃労働と〈シャドウ・ワーク〉との奇妙な結託である。賃労働を支える〈シャドウ・ワーク〉は、本来多様であってよいはずの我々の「生」を画一化し、その生き生きとした豊かさを奪い去ってしまうのだ。

本書の頁を繰れば、「平和」概念の歴史的展開や中世スペインにおける「母語」の制定過程など、一見迂遠にも見える論考が待ち受けている。膨大な資料に基づくこれらの浩瀚な著述を〈ヴァナキュラーな価値〉――人間生活の自立・自存――の剥奪という力強い糸で束ねあげていくその筆力は、凄まじいと言うしかない。徹底的かつ巨視的にものを考え抜いた末にしか宿らない気迫が、文章に滲む。

近代化批判は数あれど、イリイチほど「生」の豊かさにこだわった論者は稀だろう。初版から四十年を経てもなお魅力と現在性を損なわない彼の強靭な思想から、我々は学ぶべきものがあるはずだ――自由な「生」を我々のこの手に取り戻すために。　（浅煎り）

（三八四頁　税込一二一〇円　11月刊）

本が生まれ、捨てられるまで

本はどのように生まれ、捨てられてゆくのだろうか。普段、店頭やオンラインショップに並んでいる本を見ているだけでは分からない、本の「一生」を辿ってみたい。

◆本が生まれる①　編集者の視点◆

百万年書房を一人で経営する北尾修一さんが、編集者九人にインタビューしたイベントを基に作られた『**いつもより具体的な本づくりの話を。**』（イースト・プレス）という本がある。本書を読むと、本づくりの大体の流れが理解できる。「編集」を「1冊の本をゼロからつくること」と定義し、その実践的なノウハウ――本を作る上での心構えや著者との付き合い方、お金の話、出版後の揉め事などを赤裸々に記す。

本書に登場する編集者は誰もが本と真剣に向き合っている。だが、向き合い方は人ぞれぞれで、だからこそ多種多様な本がこの世に生まれるのだと分かる。例えば、本の企画を考える際に、篠原一朗さん（水鈴社）は置くだけで売れる本を目指し、綿密に考えを練るという。一方、柿内芳文さん（STOKE）は「もう企画は不要だ」と発言しているように企画をしない。本はその成り立ちからして作り手の考えが多大に反映されており、個性豊かなようだ。

◆本が生まれる②　様々な人の視点◆

先程取り上げた本では、本づくりが編集者の視点から語られる。他の職種からの視点が知りたい場合は『**本を贈る**』（三輪舎）というエッセイ集をお勧めしたい。編集以外にも、装丁、校正、印刷、製本、取次、営業、書店、本屋、批評という本づくりの作業に携わる一〇人が本についての想いを綴る。製本の笠井瑠美子さんは次のように語る――「本づくりの面白さのひとつは、みんなが各自の専門性を発揮しながらリレーをしているところだ」。私たちの手元に届く本は、多くの人の想いが託されたタスキといえる。

◆本が捨てられる◆

しかしながら、そんな想いとは裏腹に、本は捨てられてゆく。これについて学ぶきっかけになるのが、『**ちゃぶ台12　特集：捨てない、できるだけ**』（ミシマ社）だ。この特集では「捨てる」行為にまつわるコンテンツを掲載している。よって、本の廃棄というトピックは本誌の一部でしかない。しかし、本の印刷時に出る試し刷りの多さや、特殊加工されてリサイクル不可となった紙の処分、配送時に傷が付いて再出荷不能になった本の末路についてなど、十分に言及されている。

本誌を読んで、完成された本だけでなく、本づくりの段階で多くのものが捨てられていることに衝撃を受けた。これは印刷所や出版社の問題ではある。だが、読者である私たちも、本や本にまつわる廃棄物に意識を向けることで、行動を変えてゆけるのではないか。

◆◆◆

本は内容にばかり価値を見出されがちだが、その存在そのものにも価値がある。本が生まれ、捨てられるまでの一生に想いを馳せることで、ようやく本を読んだと言えるのかもしれない。三冊読了後、あなたの本棚に並ぶ本が一層愛おしく感じられるだろう。（前髪）

ウエルベック読書案内――誠実で露悪的なペシミズム

ミシェル・ウエルベックは現代フランス文学界を代表する作家であり、人間の性への執着を中心に自由資本主義のもたらした悲劇を扱ってきた。傍観者である主人公のシニカルな視点を通して、現代社会が抱える問題点を子細にかつ露悪的に描写する作風を得意としている。そんな彼の最新作『**滅ぼす**』（河出書房新社）は総ページ数が六〇〇を超える上下巻の大長編だ。本作はこれまでになく主人公への強い共感を引き起こすものだった。

◆これまでと一味違う穏やかさを漂わせる最新作◆

主人公のポールは妻プリュダンスとの関係が冷え切ってしまったエリート官僚という、ウエルベック作品にありがちな諦念を抱えた中年男性だ。ポールは経済・財務大臣のブリュノの腹心役であり、次期フランス大統領選に向けてサポートにつくが、ブリュノの断頭動画がネットに拡散される事件が起こる。これを皮切りにハイテクな国際テロが次々に発生し、大統領選とテロというスケールの大きな出来事に巻き込まれていく。その最中、父エドゥアールが脳梗塞で倒れ、長年連絡を取っていなかった家族と向き合うこととなる。

大統領選や過激思想によるテロ、要介護高齢者施設や医療システムが抱える問題点など、本書が扱う社会課題は多岐に渡り、綿密な取材の結実であるリアリズムあふれる描写が続く。次第に家族とテロとの関わりがほのめかされ、やがて個々の要素が結びつく一大スペクタクルが待っているのではないかとページをめくってしまう。しかし終盤、ポールの癌が発覚すると、これまでの波乱は霧散する。自らの死という絶対的な無化の前には、酷く範囲の狭い個人的な生死や苦楽以外への関心は滅ぼされてしまうのだ。最早家族さえ蚊帳の外であり、愛と読書だけが死への恐怖を緩和させる。ポールの死についての思索は強い共感を引き起こし、読者はポールと同様、これまでのサスペンスに対する興味を失ってしまう。この共感は、しかし、絶望だけでなく優しい希望も与えてくれる。

本作はウエルベック作品に特徴的な性描写やミソジニーが抑えめであり、結末に希望が見られる幅広い層が読みやすい作品となっている。ウエルベックの一冊目として手にとってはいかがだろうか。

◆ウエルベックの〝原料〟を知る◆

ここで『**ショーペンハウアーとともに**』（国書刊行会）を紹介しよう。ウエルベック作品に通底するペシミズムの源流をウエルベック自らの解説付きで楽しめる贅沢な一冊だ。訳者による簡潔なドイツ観念論の解説もわかりやすく、哲学に不慣れな読者にもおすすめ。

『**H・P・ラヴクラフト　世界と人生に抗って**』（国書刊行会）はクトゥルフ神話を生み出したラヴクラフトについての評伝である。「人生は苦しみと失望に満ちているものだ。したがって、あらたなリアリズム小説を書くことは無益である。」と始まる一文は、既にペシミズムたっぷりだ。一方でウエルベックはリアリズム小説を書き続けており、ラヴクラフトの人生観に深い共感を示しつつもほとんど真逆の作風を貫いていることは示唆的だ（本書でも語られるが、ラヴクラフトはセックスと金銭を全く扱わなかった）。

ウエルベックは現代の苦悩の最前線を描いている。深い絶望と暗い共感を新鮮なうちに味わってみてはいかがだろう。（筏）

編集後記

お世話になっております。黄丹です。単独で編集後記を執筆するのは新入りのご挨拶以来となりますが、この度は卒業のご挨拶をさせていただきます。これまで拙文を読んでいただき、本当にありがとうございました。

ところで唐突ですが、皆さまにとって本とはどういう存在でしょうか。知識を授けてくれる先生、現実を飛び出すための魔法の絨毯……。何個もあてはまる言葉はあるけれど、私にとって一番に浮かぶのは、「心の中の住人を増やすポケット」です。本を開いて登場人物、あるいは著者と共にその世界を進み、最後そっと閉じる頃には、彼らは本の中だけでなく、心の中にも住処をつくります。そしてちょいちょいと私に声をかけてくれるのです。例えば、「忘れてた！　レポート今日までやん！」と23時50分に気づいた時には、「まだあわてるような時間じゃない」と仙道君が登場してくれます。彼らがいてくれることで今の自分がいるし、生身の家族や友達同様、本当に大切な存在なのです。

以上長々と語ってしまい失礼いたしました。皆さまにとっての本についてもお聞かせいただければ嬉しいです！　それでは、またいつかお目にかかる日がくることを願って。本当にありがとうございました！　（黄丹）

当てよう！ 図書カード

暖かい春を待ち望むこの季節、京都各地では梅が見ごろを迎えています。この梅という植物は、大陸からもたらされたとされています。その伝来時期には諸説ありますが、日本で書かれた書物の中に「梅」という文字が初めに登場するのは何年でしょうか？

1. 573年　　2. 753年
3. 759年　　4. 905年

（プラチ）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは4月15日です。

《11月号の解答》 11月号の問題の正解は、3.のGesundheit!（健康）でした。くしゃみをした人の体調を気遣い、健康を祈って声をかけます。声をかけてもらったら „Danke" とお礼を返すとよいでしょう。図書カードの当選者は、ピノさん、よっさんさん、レヂデントさん、青でんぶさん、はじめさんの5名です。当選おめでとうございます。

（ひるね）

読者からひとこと

○今回もユニークな本が光っていました。普段手に取らないような、だけどおもしろそうな本を知ることができて楽しいです。評者の方々の選書眼に脱帽です。

（農学部・レヂデント）

――ありがとうございます。楽しんでいただけてとても嬉しいです。本屋が好きで隅々まで見て回りますが、書評を書くという視点があるとまた違った出会いがあったりします。今後も選書眼を磨くべく精進いたします！

○10月号の谷崎由依さんインタビュー読後の余韻が今も続いています。聞き手が『綴葉』だからこそ表出する作家のことばは、他の媒体ではお目にかかれない希少なものだと思います。谷崎作品を続けて三作読み、次は離れてみるかと何気なく手に取ったアンソロジー（『特別ではない一日』柏書房）をめくると、谷崎作品が収録されていて瞠目しました。

（文学研究科・青でんぶ）

――インタビューさせていただいた私も谷崎さんのことばの余韻が続いています。誌面で紹介しきれなかった素敵な作品が他にもあり、偶然その一つに出逢われたとのこと、嬉しいお知らせをありがとうございます。（ひるね）